

## Ⅲ. 基本的な曳釣りの方法

表面（表層）曳釣り漁法、中層曳釣り漁法で曳釣りをします。ボート側の設備として、アウトリガーが無い船と有る船では流す曳具の数や漁法が多少異なります。この二つの違いによる曳釣りの方法を代表的対象魚を例にして、必要な備品等を紹介しながら説明いたします。

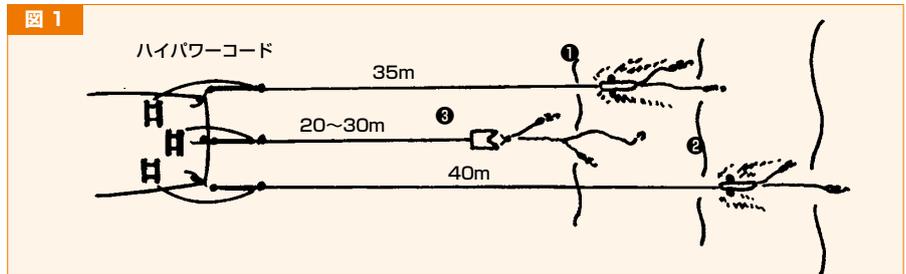
### 1. アウトリガーが無い船の曳釣りの方法

#### ○対象魚（イナダ・ハマチ系）

①②はヒコーキによる表面曳釣り漁法で、①の道糸の長さが35mならば②の道糸の長さは、通常一波前か後で30m又は40mに位置します。図1は、一波後ろで40mになります。

一波前か後ろに位置する理由は、海域によって多少異なりますが、風速3~4m/s時の波長は約4~6mが多いので、波頭手前に①を流せば次の波頭手前に②を位置することにより、船が旋回したり魚がヒットしても漁具をからめないための方法です。

③はツバメ板を使用した中層曳釣り漁法で魚がヒットするとツバメ板が海面に上がってきます。その時①②のヒコーキと重なり合わない位置を確認して20~30m道糸を出します。



※魚の喰付きが悪ければ①②③をこの基準で道糸を伸ばし、良ければ段々と短くします。中層の方がよくヒットするようなら①②にツバメ板、③にヒコーキが有効です。

※小型船で船の幅がない場合は、①②のヒコーキを右・左と外側に向けて泳ぐ潮切りヒコーキにすると便利です。(カタログP67)

#### ○使用する曳釣りセット (カタログP70、71)

①②ヒコーキセット水面1号又は2号、③ツバメ板中層セット小型又は中型

#### ○ハイパワーコード

ロープ、ゴム、ブランチハンガー  
 ※ヒコーキ類にはφ5mm、曳板類にはφ6mmを使用して下さい。(カタログP11)  
 (船体側クリートやアイにしばるため、ロープを1~2m付けます)

曳釣りの場合、魚がヒットした時、魚の口切れを防ぐため、直接道糸を船体に止めるのではなくショックを吸収するハイパワーコード(ゴム)を船体側に固定して道糸と結びます。

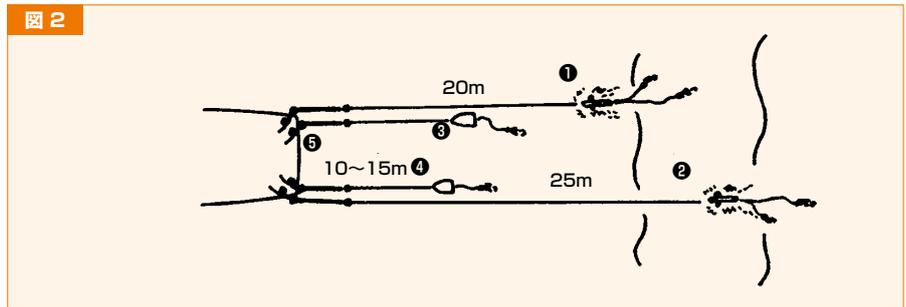
#### ○対象魚（カツオ・メジマグロ系）

①②はヒコーキによる表面曳釣り漁法で、①は道糸の長さ20m、②を25mで流します。

カツオ・メジマグロ系の魚は、暖流系で波の荒い海域にいたることが多いためヒコーキは、胸の部分に鉛が付いたカツオヒコーキ、カジキヒコーキを使用します。荒い海でもクルクル回転しないで、動きや水音を効果的に作り安定性があります。

③④は潜水板による潜水板曳釣り漁法で、道糸の長さ9~15mで流します。

この漁法は、海中に潜水板が潜った瞬間、海中3~5mで左右に大きく振りながらアクションを生じさせるので、素手では持てないほどの強い力が掛かります。あらかじめ道糸の長さを決定して船体に固定してから



潜水板を投入するようにします。小型船で船の幅がない場合は、⑤の位置一本で流します。

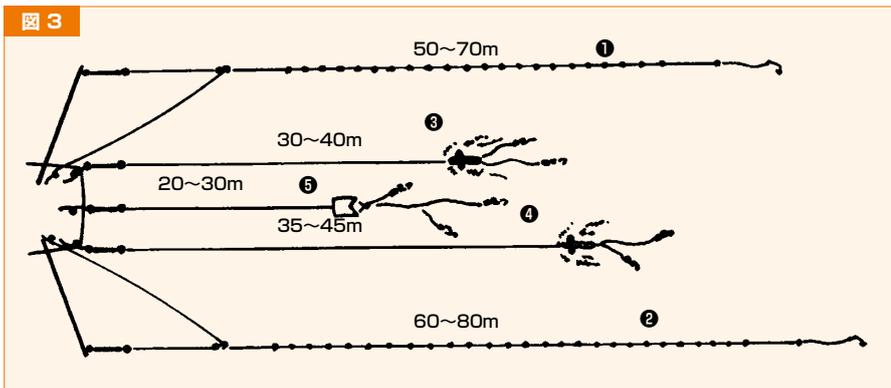
※潜水板は調整が必要です。調整がうまくいかないと、スポンと海面に浮いてしまい潜ってくれません。調整の仕方は、取り扱い説明書を参照下さい。

#### ○使用する曳釣りセット (カタログP70)

①②ヒコーキセット水面4号、③④カツオ板引セット又はメジ板引セット

### 2. アウトリガーが有る船の曳釣りの方法

アウトリガーが有ることで流せる曳具の数や種類を増やせ、ヒットする確率を上げてくれます。



#### ○使用する曳釣りセット (カタログP71)

①②ビシヤマセット浅層又は深層、その他は図1と同じ

※船のスピードが2~3ノットで浅層の場合6~12m、深層で12~18m海中に潜ります

#### ○対象魚（イナダ・ワラサ・ブリ系）

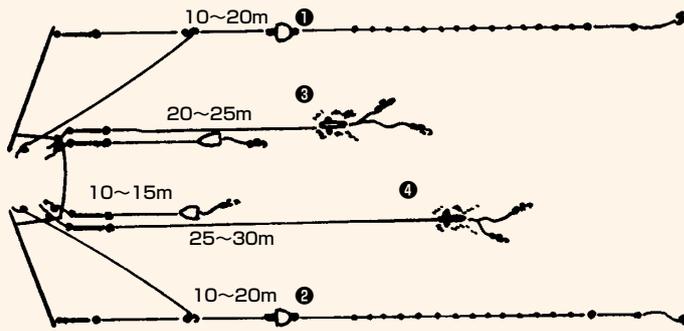
①②はビシヤマ曳釣り漁法です。潜らせる水深は鉛の重さとビシヤマの長さによって決定されますが、アウトリガー・ポール(FRP製)の強度によっては、抵抗を増すと強度不足になりますので注意が必要です。

アウトリガーに付けたビシヤマは、長く伸ばしたビシヤマ鉛の重さで船が波をたたき、さらには、アウトリガー・ポールの弾力によって、たるんだり伸びたりするため、ギジエサをシャクリ動作する効果があります。魚がヒットするとアウトリガー・ポールが深く曲がり知らせてくれます。

③④⑤のポジションでビシヤマを曳くこともできますが、アウトリガー・ポールの弾力は効果として得られません。しかし、ハイパワーコードの長いタイプを取り付けることでヒットしたことは確認できます。

○対象魚 (カツオ・メジマグロ系)

図 1



○使用する曳釣りセット (カタログP71)

①②バクダンセット小型又は中型、その他は図2と同じ

①②はバクダン曳釣り漁法です。この漁法はバクダンと呼ぶ一種のヒコーキの後ろにビシヤマを付けて重みを出し、ポンポンと前へ飛ばすことでギジエサにシャクリ動作を大きく作り出します。道糸の長さは短めで、バクダンが少なくとも海面から1m以上飛び上がるように調整するのですが、アウトリガー・ポールの強度(弾力)や角度なども大きく影響するため、バクダンの大きさ、ビシヤマの重さ等も選定する必要があります。

③④では、バクダン曳釣り漁法はできません。シャクリ動作はバクダンと比較すると小さいですが、ダボを使用することも方法です。  
※③④の位置でバクダンを使用する方法として、FRPポール(3~4m)を垂直に立てバクダンが飛ぶように調整して行なうことは可能です。(カタログP4,5を参照してください)

3. アウトリガー・ポールに曳釣り用の曳具をセットする方法

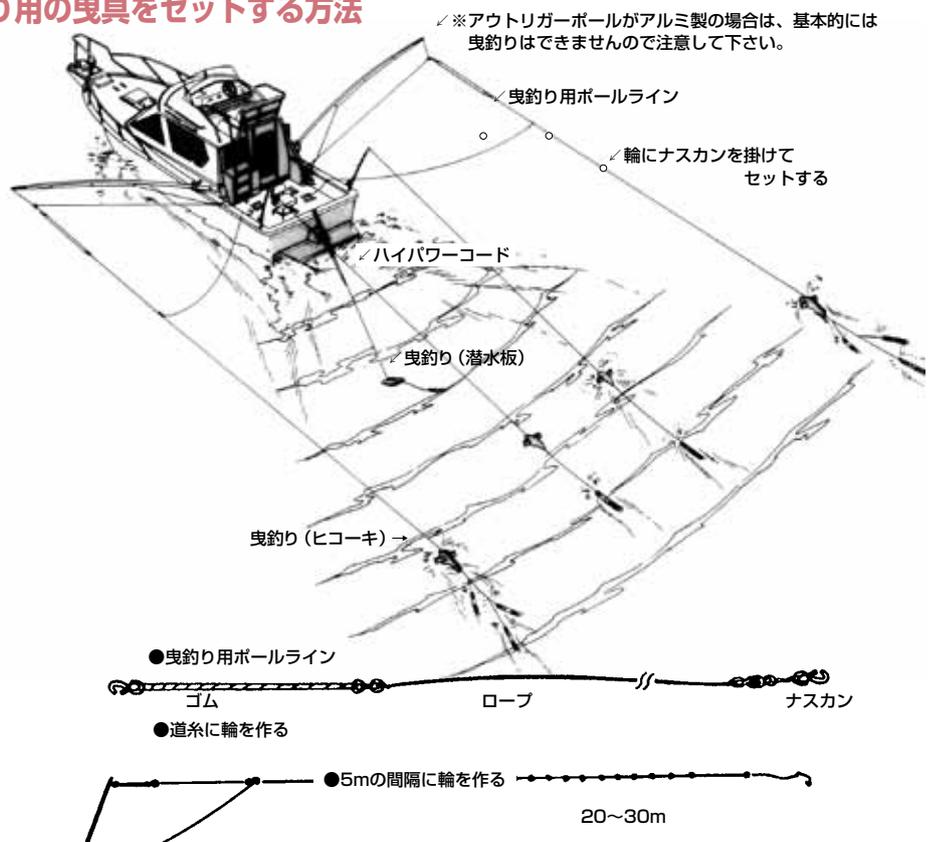
アウトリガー・システムが強度的にしっかりしていれば、ポールの途中から潜水板を曳くのも効果的です。また、このような場合は、ポールから前側に補強用のワイヤーやロープなどをとるのが望ましいセッティングです。

アウトリガー・ポールに曳釣り用の曳具(道糸)をセットする場合は、ポートを進めながら、必ず外側から先に流し始め、外側両方の仕掛けをセットし終えてから、内側の曳具をセットするのが基本です。

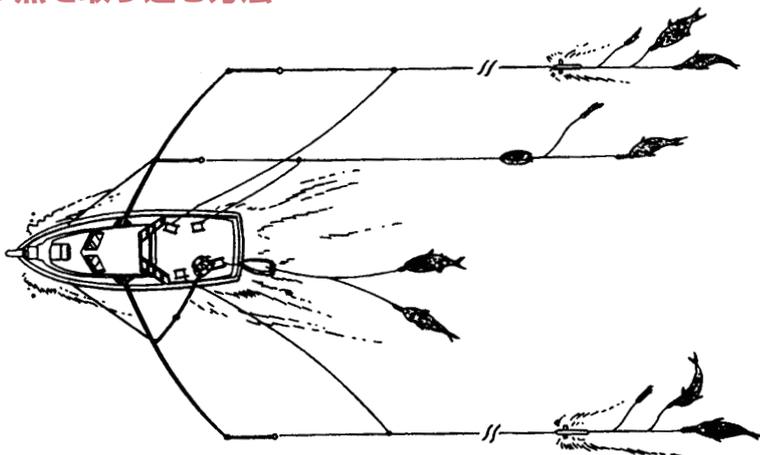
道糸を伸ばし終わったら、その途中に輪を作り、これを曳釣り用ポールラインのナスカンに掛けてセットします。そのため、30m、40mというように伸ばす長さを定めて、あらかじめ道糸に輪を作っておくと便利です。

○曳釣り用ポールライン

アウトリガー・ポールに曳釣り用の漁具(道糸)をセットする場合に使用するラインで魚の口切れを防ぐためのハイパワーコード(ゴム)と、道糸をたぐり寄せた時に船べりまで届く長さのロープによって構成されています。このポールラインによって、アウトリガーから流す漁具のセットや取り込みがスムーズに行なえます。(カタログP11を参照してください)



4. 魚を取り込む方法



掛かった魚を取り込む場合は、内側で掛かった魚から取り込み、その魚の取り込みが終わったら、仕掛けを再び素早く海へ流すことが重要なポイントです。特に喰付きの良い時は、内側だけを手操り寄せ、外側はたとえ魚が掛かっていても、そのまま放置しておきます。放置した外側の魚がオトリとなり、ますます魚の喰付きは良くなります。外側に掛かった魚は、内側の魚が掛からなくなってから、ゆっくり取り込めばよいのです。

中・小型の魚群が喰いが立って良く釣れる時は、魚が掛かったからといってあまりポートのスピードをスローにはいけません。多少魚が外れても、できるだけ魚群からポートを離さないようにして、掛かった魚を次から次へと、素早く手操り込むことが大漁のコツです。